

# 世界の腕時計

WORLD WRIST WATCH

WORLD **M**OOK

No. **157** ワールド・ムック1305  
令和5年10月15日発行  
(通巻1305号)

メカ、デザイン、歴史、どれをとっても  
腕時計ほどおもしろいものはない!

WORLD WRIST WATCH

パテックフィリップ《ウォッチアートブランドエキシビション(東京2023)》  
リミテッドエディション、  
希少なバンドクラフトコレクション  
ルイヴィトン「タンブール」  
高級時計メゾンとして確立するため  
下された決断



新生と再出発——モノリス、シャルル・ジラルディエ、大塚ローテック、HYT  
発展を目指し、新たな扉を開けた人々

オーデマピゲ「ロイヤルオーク オフシヨア」誕生30周年

「ビースト(野獣)」と呼ばれた異端児の誕生の背景を探る

2023年ブランド別新作情報 パート2

## コンセプトの完全形を目指し、拘り抜いた造形美の時計

窪田勝文氏は1957年に山口県下関市生まれ、1981年に日本大学工学部建築学科を卒業。1988年に窪田建築アトリエを設立し、住宅、公共施設、病院など多くの建築を手がける。ミニマルでモダンな建築デザインは高く評価され、多くの受賞歴をもつ。



「モノリス」と名付けられたブランドと、その最初の時計が誕生した。多くの時計ブランドのOEM製作を手掛けてきた群馬精密の初の自社ブランドであり、建築家の窪田勝文氏とのコラボレーションによって誕生した。大振りのオールブラックの外装に自動巻き3針ムーブメントを搭載し、文字盤には針のみというミニマルなデザインの時計である。

窪田氏は自身の建築哲学を次のように語る。「日々を暮らす中で最も長時間にわたって行動を制限するのが建築です。そ



窪田氏が設計し、2022年に竣工した沖縄県南城市の住宅「KI-HOUSE」。久高島と斎場御嶽の軸線上にあり、素晴らしい眺望に恵まれている。台風などの自然災害に耐える構造で、住む人に安心感をもたらす。

の建築体験が心に影響を与えます。日常の中で受けるさまざまなストレス、ストレスで壊れそうな心を建築は柔らかく解きほぐし、限らない自由へと導いていきます。そこそが建築の本当の役割であり、そんな建築を目指してずっと創り続けています」。この言葉は腕時計にも通じるだろう。時刻を確認するツールを超えた役割、それが私たちの心に作用する腕時計の在り方といえる。

ところで窪田氏は30年程前にアラン・シルベストAINの「サイクロプ」を見た瞬間に大きな衝撃を受け、それが腕時計にのめり込むきっかけだったという。「それまで腕時計に抱いていた保守的なイメージが音を立てて崩れたのです。また今日ではMIHウォッチを愛用する。「モノから装飾性を限りなく省き続けると、モノの奥底に潜む力、そして美が浮かび上がる。表層的な美ではなく、本体から滲み出る力強い美しさに勝るものはなく、その領域に達した数少ない腕時計がMIHです」。これらの時計から窪田氏が好む時計の傾向が見えてくるだろう。

5年程前、同氏はどうしても自分用

オリジナルの時計を作りたい、と思ったという。それは時計の外装のすべてをオリジナルで作ることだった。しかし1点のみの腕時計を製作するメーカーは存在しない。諦めるしかない、と落胆していた時に出会ったのが群馬精密の星野益夫代表取締役だった。「ひとつだけの時計を作るのむずかしい。しかし群馬精密のオリジナルブランドを立ち上げ、そのデザインをするのはどうだろう」と提案された。

群馬精密は従業員数30名程だが、時計の企画から開発、プロトタイプ製作、製造までを一貫して自社で行い、OEMで知られる存在だった。しかし自社ブランドを持つことはなく、いわば「縁の下力持ち」だったが、窪田氏との出会いによって新たな一歩を踏み出すこととなった。

「建築と時計デザインの両者のプロセスがほぼ共通していたことが最大の驚きでした。図面によるチェックや詳細の詰め方は、建築のディテールのチェックそのものでした。そこで何ひとつ違和感なく建築で培ったノウハウを注ぎこむことができました。しかし建築は構造体から内装、ディテールまで、すべてがコンセ

「モノリス」。直径45.00mm×厚さ13.97mmのブラック・イオン・プレーティングのチタニウム・ケースに自動巻きのMIYOTA Cal.82S0(21石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約42時間)を搭載。シースルー・バック。10気圧防水。ラバー・ストラップ。価格55万円。限定50個。

直径が45mm、厚さも約14mmある大型ケースだが、チタニウムを使ったことで軽く、手首の上で安定感がある。細い針にはルミノヴァを塗布ではなく印刷で施し、シャープさが保たれた。インデックスがない黒の文字盤だが、装着した人には時刻を読み取りやすく、窪田氏は「時計は自分のためのもの。だから自分が見えればいい」と言う。シースルー・バックを通して見えるMIYOTA製ムーブメントはモノリスの特別仕様仕上げられた。



プトに向かって一体として考え、生み出していきます。ところが時計は目指したコンセプトから離れ、それぞれのパーツが装飾性や特異性を高めて、工芸的な価値を重んじる、という流れを感じました」。窪田氏は建築のようにコンセプトに近づけようとし、それぞれのパーツは何度も試作が重ねられた。それは時計製造の常識への挑戦の連続であった。たとえばストラップを通すためのラグがない構造もそのひとつであり、窪田氏はケースからストラップが繋がりに、一体となつてひとつのオブジェとして成立することを求めた。建築的な造形美ともいえる。そして試作を重ねれば重ねるほど、窪田氏はより高い完成度を求め、群馬精密は不可能を可能にする方法を模索した。

こうしてプロジェクト開始から約5年を経て、モノリスが完成した。「2001年宇宙の旅」に登場するモノリスはその存在によって人間が覚醒していくことを促します。常に身に着けている時計が「モノリス」のような存在であれば、どんな状況であっても、どんな環境であっても、時計を見た瞬間に迷いから目覚め、活力がみなぎる存在として働きかける、そんな時計を目指して名づけました」

「今後はサイズを増やし、さらにコンセプトを拡張した新たなデザインに進化させたい」と意欲を語った。